

2025年12月7日（降臨節第2主日、A年）

メッセージ

「イエス様をお迎えする場所を備える」

（マタイによる福音書3：1-12）

司祭ヨセフ太田信三

救い主イエスをお迎する道備えのため、洗礼者ヨハネはこの世に遣わされました。ヨハネは、悔い改めてメシア=救い主の到来に備えるよう人々に呼びかけ、救い主をお迎えするためにどのような備えが必要かを指し示しました。

「天の国は近づいた」というヨハネの宣言は、イエスによって神の国の到来が開始されることを伝えるものでした。この宣言の通り、イエスを通して神がこの世界に介入します。この時にあって、ヨハネが求めた悔い改め（回心）とは、自分の内面に目を向けて反省することよりも、今すぐにも実現しようとしている神の国の訪れに目を向け、この神の出来事に自らの生き方を合わせることです。それは、来たるべき救い主イエスをお迎えする場所を自らのうちに作る、ということです。イエスをお迎えするなら、そこに神の愛が満たされ、神の出来事に参与して生きる者へと変えられるからです。

ヨハネは罪の告白と洗礼を促しました。罪とは、神と離れて生きる人間と神との間に生まれるズレです。このズレがあつては、イエスが目の前に現れても、そこに神の思い、愛を見出すことができません。ですから、この救い主の到来を目前にしている今、このズレを認め、洗礼によって神の方向へと真っ直ぐに顔を向け直す必要があることをヨハネは示し、人々に求めました。

荒れ野のヨハネのもとには、ファリサイ派やサドカイ派の人々も訪れました。過酷な環境である荒れ野は、人々を飾り立てているものを剥がし、むき出しの人間の姿をあらわにします。ヨハネはそれらの人々に向かって「毒蛇の子らよ、我々の父はアブラハムだなどと思うな」と言います。「アブラハムの子ら」とは、自分たちは選民であり、救いが約束されているのだと、ユダヤ人たちが誇って使う言葉でした。しかし、神は石ころからでもアブラハムの子孫を起こすことができ、血筋は何の役にも立たないとヨハネは言います。こうして荒れ野のヨハネのもとを訪れたすべての人々が裸にされ、罪を告白し、洗礼が施されます。そして、人々の心はこじ開けられ、来たるべき救い主をお迎えする場所がそれぞれのうちに備えられたのです。

ヨハネは、来たるべき方の洗礼は、「聖靈と火」によるものだと言います。ヨハネの呼びかけに応え、罪を認め、自らを開き、イエスをお迎えするなら、わたしたちはイエスの洗礼により、罪の殻が燃やされ、聖靈によって新たな命が授けられます。